

茅野遺跡の縄文土器概観

林 克 彦

1. 出土した縄文土器とその年代

茅野遺跡では縄文時代後・晩期の住居跡が集中して検出されたA区と、旧河道とともに水溜め状遺構（堅果類の加工が行われていたと推定されている）が検出されたEトレンチから多くの縄文土器が出土している。

A区では、縄文時代前期の諸磯a式、諸磯b式、中期の阿玉台式、加曽利E3式、後期の称名寺式、堀之内1式、堀之内2式、加曽利B1式、加曽利B2、加曽利B3式、高井東式、晩期の安行3a式、安行3b式、天神原式、千網式（浮線文）が出土している。諸磯a式から称名寺式および千網式の出土量は少なく断片的であるが、土器の型式編年上、堀之内1式から天神原式までは型式的に連続して出土しており、特に後期後葉の高井東式中段階（安行1式並行）から晩期前葉の安行3b式までの出土量が多い。

一方、Eトレンチでは、加曽利E式、堀之内1式、堀之内2式、加曽利B1式、加曽利B2式、加曽利B3式、高井東式、安行3a式、天神原式が出土しており、いずれも断片的ではあるが、加曽利B1式、加曽利B2式の出土量が比較的多い。

A区とEトレンチの出土土器の様相には若干の相違があり、時期によって、それぞれの土地の使用頻度に高低があったと考えられる。

また、茅野遺跡から出土した土器は、およそ6000年前の諸磯a式からおよそ2600年前の千網式まで見られることから、茅野遺跡のある場所は、断続的ながら3400年の長きに渡って人々が活動した場であったと推定される。

2. A区出土の縄文土器について

茅野遺跡A区には、炉の数から推定すると30軒程度の住居が構築されていたと考えられており、A区出土土器は、これらの住居の使用年代を推定する根拠となる。しかしながら、群馬県域の後期後葉から晩期中葉の時期の遺跡では、時間的に前後する複数型式の土器が混在して出土することが一般的で、住居跡から出土する土器も同じ傾向を示し、時間幅の短い一括性の高い土器群が出土することは稀である。茅野遺跡の住居跡出土の土器についても、それぞれの住居跡出土遺物の項で述べられている通り、複数の型式の土器が混在して出土しており、住居の使用年代の推定を難しくしている。

ここでは、A区出土土器について、個々の住居跡の使用年代を決めるための物差しとして土器を検討するのではなく、A区全体の土器の様相について見ることにしたい。

先述したように、A区からは前期の諸磯a式に始まり、晩期後葉の千網式までの土器が出土しているが、称名寺式までの出土土器は断片的であり、また、堀之内1式は埋設土器として出土したものもあるが、数量的には少なく、多くを語ることはできない。

後期中葉の加曽利B1式から加曽利B3式はやや出土量が多く、深鉢形土器のほか鉢あるいは浅鉢形土器、注口土器など複数の器種が認められる。いずれも群馬県域に一般的な特徴を持つ土器である。

後期後葉の高井東式は古段階（曾谷式並行）、中段階（安行1式並行）、新段階（安行2式～安行3a式並行）の変遷を辿るが（林 2008）、茅野遺跡では古段階の土器は少なく、中段階～新段階の土器が豊富である。高井東式はいくつかの類型を含む様式で、茅野遺跡では、関東地方西部域に分布する在地の

類型の他に、長野県北部から上越地方にかけて主に分布する中ノ沢B類型（高井東式新段階並行）（百瀬 2011）などが出土している。

また、高井東式に伴う土器として、南関東系の安行1式、安行2式、関西系の元住吉山Ⅱ式（あるいはⅠ式の可能性がある）、東北系の瘤付土器第Ⅲ段階、第Ⅳ段階（小林 2008）の土器が見られる。安行1式、安行2式、元住吉山Ⅱ式は断片的であるが、瘤付土器第Ⅲ段階、第Ⅳ段階の土器の出土量は多く、高井東式新段階の土器の出土量と同等か、あるいはそれを凌ぐ量である。これらの後期後葉段階の土器については後述する。

晩期前葉では、安行3a式、大洞B式が主体的に出土し、長野県北部を中心に分布する隆帯文系土器（中ノ沢B類型）が伴う。茅野遺跡出土土器の中には安行2式と安行3a式との区別が難しい土器、瘤付土器第Ⅳ段階の土器と大洞B式（あるいは大洞B式由来の安行3a式）との区別が難しい土器が見られることから、後期から晩期への移行期に、東北地方の土器の影響を連続的に受けながら間断なく土器が変化して行ったことがうかがわれる。

群馬県域における晩期前葉の土器については、従来、安行3a式に分類されてきたが、群馬県域の安行3a式段階の土器には南関東地方の安行3a式に伴う組線文系土器（粗製土器）は組成せず、無文の粗製土器が伴うなど、南関東地方の安行3a式とは様相が異なる。また、大洞B式あるいは大洞B式に由来する土器が相当量伴うと考えられるが、検討できる出土資料が少なく、実態は不明な部分が多かった。茅野遺跡では当該期の土器が多量に出土しており、大洞B式あるいは大洞B式に由来する土器もバラエティに富んでいる。当該時期の土器の分析については今後の研究に待つべきところが多いが、茅野遺跡出土土器は、その研究を推進させる重要な資料になると考えられる。

茅野遺跡から出土した安行3b式は安行3a式（大洞B式由来）からの連続性がうかがわれるものが多く、大洞BC式が伴う。また、北陸地方を中心に分布する中屋式（1式あるいは2式：安行3b式後半から安行3c式前半並行）の蓋（J 2052）が出土していることが注目される。

晩期中葉は天神原式（安行3c式並行）と大洞C1式が断片的に出土しているが、中部高地や南関東系の土器はほとんど認められない。また、次期の安行3d式段階の土器は、図示はしていないが、16号住居跡から佐野Ⅱ式と思われる破片が出土しただけである。晩期後葉の段階もまた、千網式が数点出土しただけであり、晩期中葉以降、茅野遺跡における人々の活動が縮小していったことが推定される。

3. 後期後葉土器群についての若干の考察

茅野遺跡からは後期後葉の土器が豊富に出土しており、これらの土器群について若干の考察をしておきたい。

当該期の群馬県域の在地の土器型式は高井東式である。高井東式はいくつかの類型を集合した様式であると考えられるが、各類型の検討は十分ではなく、どのような地域性があるか、どのような変遷を辿るのか、未だ明確になっているとは言えない状況である。これは、一括性の高い出土資料がほとんどないことに加え、周辺地域の土器が多数混在するとともに、それらの土器の影響を受けて変化をした土器が相当数存在するという当該期特有の問題が背景にある。

茅野遺跡出土の高井東式を一瞥すると、他遺跡出土の高井東式と同じように、様々な類型が認められる。この中で、安孫子昭二氏が高井東様式の第Ⅰ段階に位置付けた（安孫子 1993）埼玉県深谷市（旧岡部町）東谷遺跡出土の深鉢形土器の類型（仮に「東谷類型」と呼ぶ）に注目したい。この類型は、口縁部を山形（三角形）の大波状に作った深鉢形土器で、その波状部に列点を伴う横方向の沈線を数条施し、文様部分の最下端を水平にしていること（文様施文域を三角形にしていること）が特徴であ

る。また、波底部に上下2箇所を肥厚させた比較的大きめの縦瘤を貼付したものが多くことも特徴の一つとなっている。波頂部に高井東式中段階（安行1式並行）に特有の突起は付けられていない。この類型は東谷遺跡のある埼玉県北部を中心に、関東地方西部一帯から出土しており、群馬県では藤岡市の谷地遺跡などで出土している（藤岡市教育委員会 1988）。茅野遺跡では、J 8004、J 8033、J 14023、J 14024がこのタイプの土器と考えられる。J 8004の施文手法は東谷遺跡出土土器に似ているが、J 8033では列点を伴う沈線が口縁部と頸部に分離し、波頂部下に縦刻みを施した横長の瘤が貼付されるなど異なる特徴が見られる。J 14024では、文様構成はJ 8033と似ているものの、頸部の文様が列点を伴う隆帯となっており、また、J 14023では列点を伴う沈線が見られず、列点を伴う隆帯になっている。口縁部文様帯下部（口縁部と頸部の境界）が隆帯化して隆帯文土器に至るという長野県の変遷観（百瀬 2011）を参考にすれば、J 8004→J 8033→J 14024・023と変遷することが考えられ、更に列点や沈線が省略され隆帯と貼付文が主となるJ 14010や貼付文のみとなるJ 9015へと変化するのではないかと考えられる。J 14010に類似した土器が、百瀬長秀氏によって波状縁隆帯文深鉢の下限水平文様タイプとして、中ノ沢K式第3段階（安行2式並行）に位置付けられている。仮称「東谷類型」の段階や時期を決定するためには、まだ根拠となるような出土事例に恵まれないが、茅野遺跡出土土器を見る限り、少なくとも1段階で終わるものではなく、複数段階にまたがる類型であると判断される。

この類型の他に、口縁部が台形状になり、口縁部に沿って1条ないし数条の沈線を施している深鉢形土器の類型にも注目したい。茅野遺跡ではJ 4013、J 6010、J 17053、J 18006など数点が出土しているのみであるが、J 17053やJ 18006のように横刻みを施した縦瘤が二つ貼付される文様要素は、安行2式や安行2式並行期の瘤付土器に認められることから、この類型の一部が安行2式並行期に位置付けられることは確かだと思われる。

もう一つ、百瀬長秀氏によって低波隆帯文タイプとして分類され、中ノ沢B類型（晩期初頭～前葉：安行3a式並行）に位置付けられたタイプの土器にも注目したい。この類型は、波状部の単位が4単位になるものが多いという点で、高井東式大波状口縁深鉢と同じであるが、波状部の高さが低い点が異なる。口縁部文様帯の幅は狭く、文様帯の下端が無文の隆帯となっており、波頂部下の体部に2条一組の沈線による稲妻状文あるいは蛇行垂下文が施されているものが多いという特徴がある。主に長野県北部から上越地方に分布しており、群馬県でも東吾妻町の唐堀遺跡（能登ほか 1983）など長野県に近い群馬県西部域で出土している。安孫子氏はこの類型を高井東様式の第V段階・第VI段階（安行2式～安行3a式並行）に位置付けており、高井東式の終末を考える上で重要な類型である。茅野遺跡では、J 4014、J 4016、J 12010、J 13004、J 15059、J 17066、J 18009、J 18029、J 18078など複数の住居跡から出土している。また、百瀬氏が中ノ沢B類型に位置付けた平縁隆帯文土器も多数出土していることから、この時期に長野県北部の人々との頻繁な交流があったことが推定される。

茅野遺跡からは、後期後葉の南関東系の土器も出土しているが、曾谷式に比定される土器は認められない。安行1式は波状口縁深鉢のJ 2018、J 14001、J 14025などのほか、瓢形のJ 14009、粗製土器のJ 7028が見られ、安行2式も波状口縁深鉢のJ 2019、J 14003、J 18043などのほか、粗製土器のJ 6006、J 6007、J 8029などが見られる。

後期後葉の土器、特に安行2式並行期の東北系の土器（瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ段階）の出土量は極めて多い。在地の土器である高井東式の量に相当するか、あるいはそれを凌駕する量が出土している。器種は波状口縁深鉢、平口縁深鉢が主で、注口土器も一定量伴うが、瘤付土器第Ⅳ段階かと思われる香炉形土器（J 15011）も1点出土している。瘤付土器の中には、瘤付土器に安行式の要素が取り込まれた折衷的な土器が存在することが知られているが（小林 2008）、茅野遺跡でも瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ

段階の土器と安行 2 式の折衷的な土器が見られる（J 1001、J 18061 など）。また、小林圭一氏が、交易品として広範囲の拡がりをも有し、広域編年を考察する上での指標となっていると指摘している瘤付土器第Ⅳ段階の「高石野類型注口土器」（東北南半～東関東に主体的に分布）が出土している（J 18070 のほか J 18035 などとも同類型だと思われる）ほか、同様の文様を持つ浅鉢あるいは鉢形土器（J 9018）が出土していることは注目される。なお、同類型の注口土器は、群馬県域では藤岡市の中栗須滝川Ⅱ遺跡で口縁部の破片が出土している（藤岡市教育委員会 2002）。

瘤付土器としても一つ注目すべき土器は 8 号住居跡から出土した平縁深鉢形土器の J 8049 である。頸部にレンズ状の磨消杵状文を施し、その連結部に 2 個一対の耳状（2 個合わせて X 状）の貼付文を施した文様構成は、鈴木加津子氏が「山辺沢式日向南系列」として類型化した土器（鈴木 1994）の文様に類似し、器形も同類型の土器と同じである。鈴木氏が提唱した「山辺沢式日向南系列」では杵状文を施した文様帯の直下に磨消入組文あるいは磨消クランク文を施した文様帯が配置されるが、本土器には入組文あるいはクランク文は認められない。その点から全く同じと言うことはできないが、この土器を「山辺沢式日向南系列」あるいは同類型に由来する土器と言うことはできると考える。「山辺沢式日向南系列」は福島県から宮城県を中心に出土しており、群馬県内では初めて出土したものであろう。

後期後葉の関西系土器についても触れておきたい。7 号住居跡から出土した J 7002 は、波状口縁の深鉢形土器で、口縁部をくの字に屈曲させ 2 条の沈線を施している。注目すべきは波頂部の文様で、端部に刺突を伴う縦沈線が施されている。このような文様要素、文様表現の土器は高井東式には認められず、関西地方を中心に分布する元住吉山Ⅱ式（曾谷式並行）に認められることから、本土器は元住吉山Ⅱ式だと考えられる。同じ様に波頂部に縦方向の短沈線を施している J 11004 も元住吉山Ⅱ式の可能性がある。波頂部に、端部に刺突を伴う縦方向の短沈線を施した土器は関東地方西部域に点々と発見され、群馬県域では藤岡市の谷地遺跡で出土している。

以上、茅野遺跡で出土した後期後葉の土器の一部について検討した。全ての土器を検討した訳ではないが、後期後葉段階には、東北地方から関西地方の土器まで広い範囲の多様な土器がもたらされていたことが分かる。このような広範囲の地域の土器の出土は、後期中葉の加曾利 B 3 式期には見られなかったことで、その背景には、後期後葉になって人々の交流あるいは人と人とを結ぶネットワークが拡大したことがあったと推定することができるであろう。

4. 茅野遺跡出土土器の考古学的意義

最後に、茅野遺跡から出土した土器の考古学的意義について述べておきたい。

一つは土器編年研究上の意義である。先述したように、茅野遺跡からは後期後葉から晩期前葉の土器が豊富に出土しており、その内容も多様である。この時期の土器型式は、高井東式（古、中、新段階）、安行 3 a 式、安行 3 b 式で、高井東式については一部の類型について検討したが、検討できなかった多数の類型が残っており、今後、他の遺跡出土土器との比較検討によって高井東式の研究を更に深化させることができると考えられる。

また、群馬県域における晩期前葉の土器については、従来、藤岡市の谷地遺跡や桐生市の千網谷戸遺跡など数遺跡でまとまって出土している以外は、断片的な出土資料しかなく、当該期の土器研究はなかなか進まなかった。しかし、茅野遺跡からは当該期の安行 3 a 式、大洞 B 式あるいは大洞 B 式由来の土器が質量共に豊富に出土しており、今後、茅野遺跡出土土器を分析することによって、群馬県における当該期の土器研究が大きく進展することが期待される。

もう一つは、地域間交流の指標としての意義である。先述したように、茅野遺跡からは、後期後葉段

階以降、東北方面から関西方面まで多方面の土器が出土しており、どの地域の土器がもたらされたか、そしてその背後にある人の移動（地域間交流）がどのようなものであったかを検討することが可能である。

茅野遺跡から出土した他地域の土器を時期別に見ると、高井東式古段階には元住吉山Ⅱ式が伴い、中段階には安行Ⅰ式が伴う。高井東式新段階には安行Ⅱ式、中ノ沢ⅡB類型の一部、瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ段階の土器が伴い、特に瘤付土器の出土量は高井東式新段階の土器を凌駕するように見えるほどである。晩期前葉の安行Ⅲa式段階は、安行Ⅲa式に大洞ⅡB式あるいは大洞ⅡB式に由来する土器が多量に組成し、中ノ沢ⅡB類型が伴う。東北系の土器を大量に伴うという傾向は前時期（安行Ⅱ式並行）からの連続性が窺われる。

以上のような出土土器の状況から、後期後葉の高井東式新段階（安行Ⅱ式並行）から晩期前葉の安行Ⅲa式期に、東北方面、南関東方面、長野方面など四方から活発に人が往来した状況が推測される。後期後葉から晩期前葉の段階の遺物が多量に出土する遺跡は、群馬県域においては、藤岡市の谷地・中栗須滝川Ⅱ遺跡、桐生市の千網谷戸遺跡などに限られており（特に谷地・中栗須滝川Ⅱ遺跡の状況は茅野遺跡の状況によく似ている）、また、それらの遺跡では周辺地域の土器の出土が顕著に見られることから、茅野遺跡を含め、地域間交流のセンター的な役割を担っていたと推定することができるであろう。

茅野遺跡出土土器の研究は緒についたばかりであるが、茅野遺跡出土土器はそれらの研究を推進させる力を内包しており、今後、他遺跡出土土器との比較研究により、編年研究や地域間交流研究が大いに深化されることが期待されるのである。

参考文献

- 安孫子昭二 1993 「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分布『東京考古』11 東京考古談話会
小林圭一 2008 「瘤付土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
鈴木加津子 1994 「山辺沢式」の埋甕・素描『利根川』15 利根川同人
能登 健ほか 1983 『唐堀遺跡』吾妻町教育委員会
林 克彦 2008 「高井東式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
藤岡市教育委員会 1988 『C7 神明北遺跡 C8 谷地遺跡』
藤岡市教育委員会 2002 『中栗須滝川Ⅱ遺跡 ―縄文時代集落編―』
百瀬長秀 2011 『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会